

# 高校生男女のコラージュ制作に表現される 子どもイメージの探索的研究

菅 原 瑠 夏

臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 第17号 抜刷  
2019年（平成31年）3月31日



# 高校生男女のコラージュ制作に表現される 子どもイメージの探索的研究

菅 原 瑠 夏

## 目 次

第 I 章 問題	
第 1 節 研究背景	
第 2 節 子どもに対する考え方について	
第 3 節 イメージについて	
第 4 節 コラージュについて	
第 5 節 高校生を対象としたコラージュ制作 に関する先行研究	
第 II 章 目的	
第 III 章 方法	
第 1 節 予備調査	
第 2 節 本調査	
第 IV 章 結果	
第 1 節 コラージュ作品に関する分析結果	
第 2 節 インタビューの分析結果	
第 V 章 考察	
第 1 節 コラージュ作品に関する考察	
第 2 節 インタビューの考察	
第 VI 章 まとめ	
第 1 節 結論	
第 2 節 今後の課題	

## 第 I 章 問 題

### 第 1 節 研究背景

現在、我が国では、結婚や育児に関する問題が取り上げられている。例えば、総務省(2011)による調査では、1990年の30～34歳の未婚率

が男性32.8%、女性13.9%であったが、2000年の30～34歳の未婚率では男性47.3%、女性34.5%に増加したことを示している。このように未婚率が増加しているということは、結婚に対する考え方の変容を示唆しているように思われる。また、厚生労働省(2017)の調査では、2005年の合計特殊出生率<sup>1)</sup>は1.26という過去最低の記録を更新したことを示している。その後、横ばいもしくは微増傾向にあるが、2015年では1.46という依然として低い値を記録したという。このように合計特殊出生率が依然として低い状態であるということから、出産に対する考え方も変化しているように思われる。さらに、警察庁(2015)による調査では、2003年の児童虐待事件検挙件数は212件であったが、2016年では1,081件にも及んでいることを示している。このように虐待による保護者の検挙件数が増加したことから、虐待に至るような家庭が増えてきていると思われる。

しかし、こうした状況は、我が国の環境整備の不十分さが原因しているかもしれない。厚生労働省(2017)によると、「結婚したい、子どもを産みたい、結婚した後も子どもを育てながら働きたい」と希望している者も多くいるというが、その希望が叶えられないような環境のために、結果として上記の諸問題が生じてしまっている可能性を述べている。

こうした社会状況を見ると、若者が抱く結婚に対する意識や子どもに対するイメージは良いものではないように思われる。しかし、厚生労働

\*臨床心理学研究科 博士課程(前期)

働省（2009）が発表している、中学生と高校生を対象として、「将来、結婚をしたいと思っているか、子どもを欲しいと思うか」という回答を求めた調査では、「結婚はしたい」と答えた中学生は57.4%、高校生は65.0%であり、「結婚はしたくない」と答えた中学生は5.4%、高校生は6.0%で、「まだ分からない」と答えた中学生は33.6%、高校生は25.6%であった。また、「子どもは欲しい」と答えた中学生は55.3%、高校生は63.0%であり、「子どもは欲しくない」と答えた中学生は5.4%、高校生は6.3%で、「まだ分からない」と答えた中学生は35.6%、高校生は27.4%であった。つまり、結婚や子どもに対して「分からない」という回答もあるが、結婚したいと考える生徒と子どもが欲しいと考える生徒が中学生ではそれぞれ50%を超え、高校生においてもそれぞれ60%を超えていたということから、自分の将来の家庭の在り方に対する意識の芽生えを感じることができる。

以上のことから、我が国で社会問題となっている状況にあっても、中高生の子どもに対するイメージは必ずしも否定的なものではないと考えられるが、それらについて十分に明らかにした研究は見当たらないことから、現在の高校生男女の抱く子どもイメージを研究する意義はあると考えられる。

## 第2節 子どもに対する考え方について

広辞苑（2008）によると「発達とは、個体が時間経過に伴ってその心的・身体的機能を変えていく過程。遺伝と環境とを要因として展開する」とある。すなわち、発達の概念とは受胎から死までの時間的経過の中で遺伝的要因と環境的要因によって、身体的かつ精神的な変化を生じることを意味することになる。

このような現在の発達観に至るまでは、さまざまな主張によって変遷してきた。その中でも特に、子どもに対する考え方の基盤と考えられるのは17～19世紀のヨーロッパで発展した思想の数々であった。乾（1997）の記述に基づい

て、以下にその要旨をまとめてみる。

17世紀後半では、ロック（Locke, J.）が「乳児は何も書かれていない白紙（タブラ・ラサ）で、子どもの精神は水のように変化しやすいものである」と述べており、18世紀半ばでは、ルソー（Rousseau, J.J.）が「創造主の手をはなれるときは、すべてのものは善であるのに、人の手に移されると、すべてのものが墮落する」と述べている。一方、18世紀後半にダーウィン（Darwin, C.）が提唱した進化論は、人間の発達の観念を大きく揺るがした。彼は神や自然による決定的存在を認めず、多様な種が自然選択の下で進化するという思想を訴えたが、この主張の行きつくところには発達心理学の萌芽があると考えられる。

西洋では、こうした変遷がみられるが、我が国では古来より、子どもは物としての考えが深く根付いていた。古代日本の子どもの境遇を取り上げたものには「日本書紀」の「少子部連」の挿話が最初であるといわれている。そこには、人間の子が蚕のように気軽に集められ処置されたという話が出てきて、当時の人々が子どもをどのように捉えていたかが推測される。また、山上憶良の父性愛に満ちた歌があり、そこで多用された言葉の「子宝」は人間という性質ぬきの所有の対象たることをほのめかしているという。そして、人身売買や身分の低い者の子どもが仕事を請け負う文化もあり、子どもを所有物と捉えていて、無汚の子どもという概念がみられなかっただろうという。その後、徳川幕府初期には子どもは主家の所有物となって国家の道具の一つとして場所を得て、後の「富国強兵」観念につながり、敗戦後の海外からの教育文化の輸入も影響して未完成の人的な資源としての概念が長らく横たわるようになっていったという。そして、1945年の戦後では連合国軍総司令部（GHQ）が日本社会を統制して子どもの権利が徐々に確立されていき、子どもに対する概念が大きく変化していった。

このような変遷を経て、我が国では「児童福祉法」や「幼稚園教育要領」また「保育所保育

指針」が示す「子どもは単に大人に保護される存在また大人の付属物だけでなく、独立した人格をもつ権利の行使者」として子どもの存在を認めるに至った（後藤，2005）。

### 第3節 イメージについて

イメージは、個人の内側にあるものなので、それを他者に伝えることは難しいといえる。河合（2000；2013）は、イメージについて『私』の体験そのものであり、『私』以外に一『私』が表現しない限り一知りようがない」といい、「イメージは強力な特性を持つ」と述べている。その理由として、次のようなイメージの特徴を示している。第一に、「自律性」という点を挙げている。イメージそのものが自律的なもので、自我のコントロールを超えているということを示している。イメージは自律的に内界において生じる類のものであるので、意識的に何かを思い出すことや空想することより深い感じがあると述べている。第二に「具象性」という点を挙げている。イメージは具体的な行為が抽象的な表現で示されるという。そして、イメージが生じる時は何らかの体感を伴うため、身体性が関与していることも特徴の一つであると述べている。第三に、「集約性(多義性)」という点を挙げている。イメージは多様な内容を集約しているという。このため、一義的な解釈をせずに多義的な視点で捉える必要があると述べている。第四に、「直接性」という点を挙げている。イメージはその人に直接的に訴えてくるものであるという。そのため、箱庭制作や夢の語りをしてしていると、その直接的なメッセージに気づかされると述べている。第五に、「象徴性」という点を挙げている。イメージは意識的に明確には把握しきれずに、簡単に言葉に置き換えることができないものであるという。例えば、ある人にとっては重要な意味を持つ対象が、別の人となるとそれはまた別の意味として作用すると述べている。第六に、「創造性」という点を挙げている。日々の生活そのものが創造活動であり、その背後にイメージが存

在しているという。これは、考えることの背後にイメージも動いているとも言い換えることができる」と述べている。また、これらの特性に加えて、「心的エネルギーを運搬する」点も挙げている。例えば、あれこれ思考して疲れてしまつて何もできなくなっているとき、心のエネルギーは無意識の領域に引き込まれているが、新しいイメージが湧くと、退行していた心的エネルギーとともに意識領域に流れ込んできて、そのイメージによる新しい発見をもたらすことを述べている。

以上のことから、コラージュなどのイメージ技法を媒介にして、子どもに対する考え方を調べることは、意識する側面だけではなく意識を超えた側面、つまり、その人の深い部分にある子どもイメージを探る際に有用であると考えられる。

### 第4節 コラージュについて

杉浦(1994)によると、「コラージュ(collage)」とは、フランス語の「coller」という単語の「糊による貼り付け」を指す語源から名付けられている。一方、森谷（2015）は藤本（1994）による、ラテン語の「にかわをつくるもと」という意味の「コラーゲン(collagen)」に由来する説を挙げている。また、コラージュの原型となるものについて、西村（2015）は「パピエ・コレ(papier collé：貼紙)」が基盤になっているといい、1908～1911年頃にブラック(Braque, G.)やピカソ(Picasso, P.)がはじめたキュビズム(立体主義)の表現方法であり、現代芸術の表現技法としてのコラージュに大きな影響を与えたことを述べている。

こうしたコラージュが治療場面で技法として考えられはじめたのは、1972年にバック(Buck, R.E.)とプロヴァンチャー(Provancher, M.A.)による「評価技法としてのマガジン・ピクチャー・コラージュ」という論文がアメリカ作業療法誌に掲載されたことであった(杉浦, 1994)。これ以降、作業療法の分野で用いられるようになり、芸術療法の分野でも使われはじ

めたという。日本では1987年以来、箱庭療法の概念を組み合わせながら、森谷寛之氏と杉浦京子氏らによる活動を契機に研究や実践が急速に見られるようになったという。こうして、次第に研究の広がりを見せるコラージュ療法は、山中（1990）によると、比較的簡便に行うことができること、年齢性別を問わずに内的世界を表現できること、描画法より抵抗感を大きく抱かずに制作できること、制作者が素材を操作できることから支持されるようになったという。

一方で、森谷(2015)は箱庭療法とコラージュ療法の関係について次のように述べている。彼は、ある対談をきっかけに「立体のレディ・メイドでも、平面のレディ・メイドでも効果は変わらないだろう」と考えて、コラージュ療法を発想したという。西村（2015）は、箱庭がミニチュアというレディ・メイドを砂箱に配置して表現するように、コラージュ療法は「台紙の上でレディ・メイドを組み合わせて表現する」と考えることができると述べている。

このような背景がある中で、コラージュのやり方を杉浦（1994）が示している。それは「写真や絵や文字などを、新聞、雑誌などから切り抜き、これを画用紙やケント紙などに貼って一つの作品にする」ことである。なお、現在の主な方法としては、「マガジン・ピクチャー・コラージュ法」というクライアントが素材を切り抜いて貼り付ける方法と、「コラージュ・ボックス法」という治療者側が素材の切り抜きを箱の中に入れてクライアントに提示する方法の2種類とされている。

こうした臨床場面で用いられるコラージュ技法は、写真などの「レディ・メイド」を制作者なりに組み合わせていくということから、イメージを媒介して内的世界を感じる体験であると考えられる。杉浦（1994）は、「意識的な世界だけでなく、無意識的世界もかもしだされる」といい、それまで焦点をあてていなかった心の部分がコラージュによって表現されるので、「自分の内的世界を台紙の上に整理していくこと（コラージュ・アクティビティ）」

は「新しい自分を洞察する心の発達」という側面があるという。

したがって、安全性が保たれている中で制作者が自ら選択して内的世界を表現することができるコラージュは、高校生のもつ子どもイメージを意識面・無意識面を含めて理解するときの手助けとなる方法であると思われる。

### 第5節 高校生を対象としたコラージュ制作に関する先行研究

コラージュ制作に関する研究は、さまざまな年齢や疾患、表現特徴など、あらゆる視点から検討されている（西村，2015）。その中で、高校生を対象とした研究では、以下のことが分かっている。

杉浦（1994）は、箱庭療法やロールシャッハ・テストを参考にして設定した材料を使って、幼児から高齢者を対象とした基礎的研究のうち、高校1年生から3年生の58名（男20名・女38名）を対象とした形式的特徴の結果について、次のように述べている。

まず、「切片数」について、高校生群だけではなく他の群においても大きなばらつきがあったことから、個人差による影響が大きく表れるものであると考えられるので、作品のバランスや切片の大きさ、内容など他の要素も踏まえてアセスメントに用いることが重要であると述べている。また、滝口・山根・岩岡（1999）によれば、「切片数」は関心の広がりや知的能力、心的エネルギーに関係するものと思われると述べている。一方で、西村（2015）は、ゲゼル（1972）が示す人間の成長サイクルの視点から、内的感情や緊張をうまく解放できない不安定さと「切片数」の減少が関連していると思われるといい、エリクソン（1969）が示す成熟過程にある前思春期と青年期の男女の違いから、女子に「切片数」が多いことは内的成熟の過程による違いが表れたものと考えられるので、コラージュ表現の「切片数」はイメージの表出力とも関係があると述べている。

次に、「余白の分量」について杉浦（1994）は、



全体的な傾向として、発達とともに分量が減少していくものと思われるという。これは、表現力の発達や心的エネルギーの増大によるものであると述べている。また、西村（2015）は、長尾（2005）が示す青年期の自我発達上の危機状態の視点から、心が悶々として言葉にならずに急に無口になる思春期の特徴が「余白量」と関係しており、精神活動の中での表出力・表現力の弱さを表しているといい、女子に余白が少ない要因としては、内的成熟と精神活動の関係があると考えられると述べている。

「はみ出し」について杉浦（1994）は、発達とともに減少するが、成人で高校生よりやや増加して高齢者ではかなり増加したことから、枠の中に納められる力と関係がある運動系の発達と繋がりがあると考えられるという。また、意識的もしくは無意識的に枠からあふれさせるアクティビティにも関連があるとも考えられるという。例えば、細かい心配りのされていないような、いかにも統制の取れていない粗雑な切り方や貼り方によって「はみ出し」が見られた場合は、自己コントロールの力が弱くて枠内に収めることが出来ない状態によるものとされている。また、西村（2015）は、空井（2002）の示す主観性の強さや統合性の弱さなどから、「はみ出し」は思春期特有の急激な身体発達に伴う生理・心理・対人関係などの不安定さが増すので、自己をコントロールできない自我の統合性と関係があるように思われると述べている。

「主な色彩」が黒色、赤色、白色の順で多かったことについて、杉浦（1994）は、浜畑（1989）のホメオエゴスタシス構造展開模図による色彩の捉え方を用いて説明している。それによると、黒色は死の衝動を持ち、委縮・恐怖・不安・不信・疑惑の意味を、赤色は自己主張衝動を持ち、非難・不満・攻撃・適応・良好の意味を、白色は自己否定の衝動を持ち、失敗感・警戒心の意味を示すという。このことから、高校生は色彩のはっきりした明快な作品が多く、意図的に何かを訴える自己主張的な作品を作る能力が高くなることを窺わせると述べている。

また、杉浦（1994）はこの研究とは別に事例で扱った女子大学生の作品で、下の切り抜きが見られるように、その上に重ねた切り抜きの一部だけを糊付けした「重ね貼り」が見られたことを報告している。特殊な重ね貼りがある場合は意識・無意識の重層性を示唆することがあるので、アセスメントの要素として意義あるものに思われると述べている。また、滝口ら（1999）によると、高校生は表現の一つとして「重ね貼り」を用いるようになり、あるものを表面に出したり隠したりする心理を表しているように考えられると述べている。一方、西村（2015）によれば、こうした貼り方が男女によって違いが見られるということについて、表現力の工夫に差が見られ、内的表現力と関係していると思われると述べている。

「主な切り方」として四角形が多かったことについて杉浦（1994）は、切り抜く材料が長方形の印刷物である雑誌やカタログであったことから、四角い形がとられやすいといい、気に入ったものは物の形に切り抜くことが「主な切り方」として現れたという。他の群と比較すると、高校生は型にはまった切り方をする群に含まれることも述べている。また、滝口ら（1999）によると、男子は細かい形に切る傾向があり、女子は大まかな形に切る傾向があったが、切片の内容を意識しながら切った者は女子に多かったと述べている。このことについて、西村（2015）も同様に、男女には切り方にも美意識の差があると思われると述べている。

さらに、杉浦（1994）では次のような内容的特徴も述べている。使用された素材が最も多かったカテゴリーは人間で、次いで物体、食べ物で頻度が高かったという。このことを、ロールシャッハ・テストにおける解釈を用いながら考察している。例えば、人間の部分を切り抜き、貼り付けている場合は、その制作者の抱える問題が反映されやすく、両価的な感情が窺えらると述べている。また、物体のカテゴリーに含まれる衣類を貼り付けている場合は、社会的な評判や魅力に対する関心を反映されやすい

と述べている。そして、食べ物を貼り付けている場合は、口唇期の問題や性的なものとの関連も考えられるが、生命力や心的エネルギーを補給するものとしての意味を持つ可能性も述べている。また、滝口ら(1999)においても、最も出現頻度が高かったカテゴリーが「人間類」であり、特に女子の作品では、女性の肉体を強調したようなものが目立った。一方で、人間の登場しない作品では、男子は「乗り物」や「自然風景」が見られ、女子では「建物」や「建物一部屋の内装」、「物体—化粧品」などが見られ、それぞれが興味を向ける対象であった。また、社会の動きや流行を敏感に反映している作品も見られた。このことから、男女の興味の対象の違いが反映されることが分かるといい、女子の作品の方が多彩であると容易に推測できると述べている。

このように、素材を切って貼り、コラージュ作品に仕上げていく作業には年齢また男女によって大きな違いがあることが分かる。

山根・森谷(1999)は、コラージュの集計的調査を検討する目的で、中学1年生から3年生を対象としたコラージュ作品に関する調査研究を行い、さらに滝口(1994)による小学生を対象とした調査結果と、杉浦(1994)による調査のうち高校生から高齢者の結果を比較している。年齢による変化として、以下のいくつかの点が見出されている。関心や知的能力、心的エネルギーなどに関係する「切片数」は、小学生では学年が上がるごとに増加しているが、中学生以降は17～18枚に落ち着いていた。また、表に出したいものと隠したいものに関係する「重ね貼り」は、小学生と比較して飛躍的に増加していた。そして、小学生では羅列的な表現が見られていたが、中学生では明確な中心となる切片があることを示す「中心性」や、空白の偏り・切り方と貼り方の粗雑さ・切片の内容の不自然さ・中心性の有無・テーマの有無を示す「統合性」が増加していた。これらのことから、中学生になると建前と本音といった複雑で微妙な心理を使い分ける能力が発達すると考えられ

るといふ。

男女差については、女子生徒は小学生時代から一貫して「切片数」が多く、切片形では輪郭に沿って切っており、作品もまとまりあるものであった。ところが、男子生徒は、「切片数」も少なく四角形に切っているものが多く、単調な垂直位置に固定する作品が多かった。これらのことから、男子生徒は自分の持つ活動的であり攻撃的である衝動のエネルギーが大き過ぎてまとまりきれないと考えられることに対して、女子生徒は自由で軽やかな動きを表現していると考えられるという。また、身体像については、男子生徒の場合、身体への貼り合せ方が強引で、まとまりも悪く、奇妙な身体像を造っていた。女子生徒の場合、身体部分の貼り合せ方は男子生徒と比較して奇妙さが少なく、調和を図ろうと努力する印象を与える作品が多かった。

以上のことから、高校生は男女それぞれが異なるコラージュ作品を制作する傾向があると考えられるので、子どもイメージをテーマにした本研究でも、性差に注目する必要があると考えられる。

## 第Ⅱ章 目的

現在、結婚や育児に関する諸問題が深刻となっている。このような社会状況の中に生き、育児からまだ遠い位置にいる高校生が抱く子どもに対するイメージを探索的に検討することを目的とする。

## 第Ⅲ章 方法

### 第1節 予備調査

調査の構造や子どもイメージに使用されるコラージュ素材、インタビューの質問項目を検討するために、素材を持参してもらった素材持参群(臨床心理学を学ぶ大学院生4名、男2:女2、平均年齢:27.0歳、SD:4.0)を調査協力者(以下、協力者)として予備調査Ⅰを実施した。そして、その予備調査Ⅰの結果に加えて、先行研



究（今村ら，2014（2）；今村ら，2015-a；今村ら，2015-b；二村ら，2014（1））を基に，調査者が選定した共通素材を提示してコラージュ制作を行ってもらう，素材提示群（予備調査Ⅰとは異なる臨床心理学を学ぶ大学院生2名，男1：女1，平均年齢：23歳）による予備調査Ⅱを実施した。

### 第1項 予備調査Ⅰ

#### (1) 「子ども」をテーマとしたコラージュ制作の実施

コラージュ制作にあたって，予備調査前に「今回は，子どもをイメージしてコラージュを作ってください。糊やハサミなどの工用具はこちらで用意しますが，制作のために必要な素材は各自で用意していただきたいです」ということを伝えた。そして，開始前に「予めお伝えしたように，今回は子どもをイメージしてコラージュを作ってください。お持ちになられたものを台紙の上で組み合わせて，糊付けしてください。このとき，持ってきていただいた物の中から再び選び直したり，切り抜いたりしても構いません。それでは，質問がなければ始めてください」と教示して，コラージュを制作してもらった。

#### (2) インタビューの実施

制作後に，「これからいくつか質問します。差し支えない範囲で回答してください」と教示して，コラージュ制作体験及び作品に関する質問に回答してもらった。このとき，質問項目は先行研究（池野谷，1997；森谷，2015；申，2015）に基づき，「コラージュ経験の有無」，「制作体験についての感想」，「作品の説明」，「制作体験による連想」，「素材とイメージの繋がり」，「タイトル」，「人間の素材について」，「動物の子どもの素材について」，「全体の感想，言い残し」と設定した。また，内容をより詳しく把握するために，必要に応じて追加質問を行った。

#### (3) 結果と考察

予備調査Ⅰでは，次のようなことが分かった。

##### ①場所・位置について

本予備調査では，調査者と協力者だけの空間

で対面となるように着席し，制作や回答の過程を窺った。このとき，協力者が「見られていて緊張する」，「見られているとやりづらい」と語った場面があった。そこで，本調査時には，机を二つにして距離を空けるようにした。そして，目線に留意するようにした。

##### ②コラージュ経験の有無

本調査の高校生は，美術の時間にコラージュ体験をしている人が混じっていたが，予備調査でコラージュ経験の有無に限らず，全ての協力者から「楽しく作れた」，「満足のいくものに仕上げることができた」という回答を得たことから，コラージュ経験が本調査に大きな影響をもたらすことはないと思われる。

##### ③制作体験についての感想／作品の説明／制作体験による連想／素材とイメージの繋がり の質問からわかったこと

全ての協力者が「これは～という意味で貼って」，「これは～というイメージで貼って」と語る一方で，「なぜだか分からないけど，ここに置きたくて」，「説明するのが難しいけど，これはどうしても使いたくて」と語ったことから，制作者が日常的に意識している子どもイメージの側面と意識化されない子どもイメージの側面を捉えられる可能性があると思われる。

##### ④タイトルについての質問

全ての協力者が「これを貼っているので」，「～というテーマがあるので」と語ったことから，この質問は，素材に投影されている制作者の内的世界を統合する作業であることが分かった。子どもイメージを捉えるときの参考になると思われる。

##### ⑤人間の素材／動物の子どもの素材

ある協力者が「真真中に子どもの写真を置いたら，この子のイメージに合うようにアイテムを置いてしまった。今見ると，もう少し違うものでも表現できたなあとも思う」と語った。子どもと人間の写真は，本研究の意図と異なるコラージュを制作してしまう可能性がある。また，全ての協力者が「人間や動物の子どものアイテムを使わなくても」代替できると回答した

ので、子ども及び人間そのものの素材は敢えて除外することにした。

⑥本調査の共通素材を決めるための他の情報まず、色彩が豊かな素材が選ばれた。これは、子どもの持つ「エネルギー」や「無邪気さ」、「漂う雰囲気」が理由となっていると語られたことから、色彩が子どもを表現する方法の一つとして用いられると考えられた。次に、子どもが「好きそうなもの・好きなもの」と「使っていいそうなもの・実際に使っているもの」を選ぶことであった。子どもに人気のある「遊具」や「キャラクター」が子どもを連想するためであると語られた。また、「柔らかい」や「ふわふわ」というような素材が貼られた。これは、「子どもの身体的な特徴のように感じるから」と語られた。そして、「花」や「木」などの「植物」を貼ることであった。これは、子どもの「成長を感じられる」と語られたことから、植物の成長が子どもの成長を連想するためだろう。

以上のことから、共通素材として、「子どもが好きそうなもの」や「子どもが実際に使っているもの」、「柔らかい」や「花（植物）」を用意する必要があると考えられる。しかしながら、このようなポジティブな意味で使われているカテゴリーだけでは偏りを生じさせてしまうため、本予備調査結果とは対照的なカテゴリーも用意する必要があると推察できる。色彩については、色画用紙を素材として加えることにした。

## 第2項 予備調査Ⅱ

### (1) 「子ども」をテーマとしたコラージュ制作の実施

先行研究（今村ら、2014 (2)；今村ら、2015-a；今村ら、2015-b；二村ら、2014 (1)）と予備調査Ⅰの結果に基づき、素材集を制作し、「自然・風景・建築物」、「植物」、「動物」、「物体」、「乗り物」、「食べ物」、「イラスト」、「文字」、「色画用紙」をA4用紙50枚にまとめて提示した。また、調査前に「今回は子どもをイメージしてコラージュを作ってくださいま

す。こちらの冊子からアイテムを選び出したり、切り抜いたり、台紙の上で組み合わせたりして、貼り付けてください。また、この調査は、作品の上手や下手、ルールなどは無いので自由に作ってください。出来上がりしましたら、声をかけてください。それでは、質問がなければ始めてください」と教示して、コラージュ制作を始めてもらった。

### (2) インタビューの実施

制作後に、「それでは、作っていただいた作品を見てください。今から10個の質問をします。差し支えない範囲で回答してください」と教示して、先行研究（池野谷、1997；森谷、2015；申、2015）と予備調査Ⅰの結果に基づき、「コラージュ経験の有無」、「制作体験についての感想」、「作品の説明」、「制作の手がかり」、「制作体験による連想」、「素材とイメージのつながり」、「自分または自分に近い素材」、「タイトル」、「提示素材以外で気になる素材」、「全体の感想、言い残し」の質問項目を設定した。また、予備調査Ⅰと同様に、必要に応じて追加質問を行った。

### (3) 結果と考察

予備調査Ⅱでは、次のようなことが分かった。

#### ①素材の数量や比率、内容について

協力者が「全体的にアイテムが少ないと思った」、「自分のイメージに合うものが少なく、選ぶのが難しかった」と語ったことから、本調査では予備調査Ⅱ段階の共通素材より全体的に数量を増やして提示する必要がある。また、「子どもが使いそうなものが特に少ないように感じた」、「花のアイテムをもっと使いたかった」ということから、「子どもが実際に使っているもの」と「花（植物）」に関しては他の素材より数量を増やす必要があると思われる。また、協力者は「キャラクターのアイテムもあってもいいのでは」と語っていたが、著作権や肖像権の問題を踏まえると、利用や印刷物への使用において許諾されているものを素材として使用する必要があるといえる。

#### ②素材の大きさについて

協力者が「これは画用紙の一面に貼りたかったけど小さかったから、少し不満だった」、「これはもう少し小さい感じが良かった」と語ったことから、現実的な形態に近くなるように素材の大きさに可能な範囲で配慮する必要があると思われる。また、協力者が「この(A4)サイズの大きさは切りやすくて」と語ったので、共通素材の大きさはA4サイズにすることにした。

### ③色画用紙について

先行研究(今村ら, 2014(2); 今村ら, 2015-a; 今村ら, 2015-b)においても、色画用紙について「自由度が高く、そこに投影できるイメージが幅広い」と述べており、上述したように、コラージュ制作の素材を追加することが望ましいといえる。本調査では「マンセルの色体系(Munsell color system)」を参考にした。この体系は、アメリカの画家であり美術教育家であったマンセル(Munsell, A.H.)が考案したもので、色の3属性と呼ばれる色相・明度・彩度の視点から立体的に構成されており、色を分類して表示する基準として日本工業規格(JIS)に採用されている(小林, 2003; 大山, 1988; 坂田, 2009)。先行研究(今村ら, 2014(2); 今村ら, 2015-a; 今村ら, 2015-b)の選んだ色を参考にしつつ、この体系に基づいて、うす桃色(色相7.5RP, 明度7/彩度10)、淡黄色(色相5Y, 明度8.5/彩度11)、水色(色相6B, 明度8/彩度4)、カナリヤ色(色相3GY, 明度7/彩度10)、藤色(色相10PB, 明度6.5/彩度6.5)、暗灰色(N2)の5色を使用することにした。

## 第2節 本調査

### 第1項 調査協力者

関東にある私立高等学校在学中の1～2年生に事前に募集をし、同意の得られた生徒20名(男8:女12, 平均年齢:16.1歳, SD:0.7)を調査協力者(以下、協力者)として調査を行った。

### 第2項 調査時期・場所

2017年7月～9月にかけて日程を設けた。場所は、協力者の学校の空き教室を貸してもらって

実施した。

### 第3項 調査に用いた用具

#### (1) コラージュ制作の用具

- ①八つ切り白画用紙(27 cm × 38 cm) 1枚
- ②ハサミ
- ③スティック糊, 液体糊
- ④共通素材

共通素材の内容は本予備調査の結果を踏まえ、『コラージュ療法基本材料シート集』(今村ら, 2014(2); 今村ら, 2015-a; 今村ら, 2015-b; 二村ら, 2014(1))を参照して、インターネットにあるフリー素材(足成2017年7月15日取得; みふねたかし2017年7月15日取得; NASA 2017年7月15日取得; すしばく2017年7月15日取得)から調査者が選び出した。それは、「自然, 季節」, 「植物」, 「建築物, 風景」, 「物体」, 「食べ物」, 「乗り物」, 「動物」, 「イラスト」, 「文字」, 「色画用紙」というカテゴリで設定した。

そして、それらを刺激ごとに分けてA4用紙に収まるようにレイアウトし、カラーコピーしたものを透明なファイルに綴じて冊子状にした。素材は全部で583点, A4用紙70枚となった。

また、本研究で提示した共通素材は人間の写真や子どもの写真, 家族を連想するようなユニットで写る生き物の写真を可能な限り除外した。先述したように、本予備調査において、子どもそのものを直接的に連想してしまうおそれのある素材は、協力者が持つ子どもイメージの表出を妨げる可能性があるためである。

#### (2) インタビュー時の使用道具

- ①作成してもらったコラージュ作品
- ②ICレコーダー
- ③記録用紙

### 第4項 手続き

調査協力を募る前に、高校の先生や生徒及びその保護者に向けて、本研究の説明と協力をお願いを記載した研究協力依頼書を配布した。その後、研究協力してもらえらる生徒とその保護者

に研究協力同意書を渡して承諾を求めた。そして、調査前には調査内容と同意書の確認を再度行い、終了時には制作してもらったコラージュ作品を回収して、1,000円分の図書カードを謝礼として渡した。なお、この研究は大学の倫理審査を合格している。

#### (1) 「子ども」をテーマとしたコラージュ制作の実施

コラージュの制作にあたり、予備調査Ⅱと同様の教示をして、制作を始めてもらった。

#### (2) インタビューの実施

制作後に、「それでは、作っていただいた作品を見てください。今から10個の質問をします」と教示して、「お話いただく内容を全て録音したいのですがよろしいでしょうか」と録音の承諾を得てから、予備調査Ⅱと同様の質問を行った。また、本予備調査と同様に、必要に応じて追加質問を行った。

### 第5項 分析方法

本研究は、子どもイメージを探索的に検討することを目的としてコラージュ作品とインタビューを行ったので、それぞれに適していると思われる次のような分析方法を行った。

#### (1) コラージュ作品に関する分析方法

制作者が表現した子どもイメージを理解するために、先行研究（今村，2006；西村，2015；杉浦，1994）で示されている形式分析と内容分析において、本研究に適応できるとと思われる次のような項目を抜粋して集計した。なお、その統計処理はIBM SPSS Statistics22を用いて、5%有意水準とした。

##### ①形式分析

形式分析については、まず、コラージュ全体の特徴に関する項目として「台紙方向」、「切片数」、「余白」、「はみ出し」、「主な色彩」を取り上げた。なお、評定方法は次のとおりに行った。「台紙方向」については、作品が完成した状態をその作品の方向と見なし、「切片数」については作品に貼られている素材の数を数えた。「余白」については、鋤柄（2013）を参考

にして、縦×横1 cm<sup>2</sup>の方眼用紙を画用紙の大きさである27 cm×38 cmのサイズに調整し、それに作品を転写して余白量を測定した。しかしながら、これはコンピュータ処理のような正確な測定方法で算出された数値ではないため、本研究においては参考程度に扱うことにした。「はみ出し」については、少しでも画用紙からはみ出しているものをはみ出した素材のある作品とした。「主な色彩」については、調査者の主観的な見地にならないようにするために、本予備調査の協力者とは異なる臨床心理学を学ぶ大学院生5名（調査者含む）に評定してもらった。

次に、素材の切り方に関する項目として「三角形」、「四角形」、「多角形」、「丸型」、「（対象物の輪郭に沿って切る）物の形」、「不定形」、「ちぎる」、「（対象に関係のない何らかの形に切る）創作」、「その他」を取り上げた。なお、評定においては、全ての切り方が少しでも見られた場合にそのような切り方がある作品と見なした。

そして、素材の貼り方に関する項目として「重ね貼り」、「逆さ貼り」、「横転貼り」、「（複数の切り抜きを関連づけて組み合わせる）結合」、「（色画用紙以外の素材を複数に分割して切つてばらばらに貼る）分裂」、「枠のある切り抜き」、「その他」を取り上げた。なお、評定方法は次のとおりに行った。「重ね貼り」、「横転貼り」、「結合」、「分裂」、「枠のある切り抜き」については、少しでもその貼り方が見られた場合にそのような貼り方がある作品と見なした。「逆さ貼り」については、提示した素材を明らかに反転して貼っている場合に、素材を逆さにする貼り方がある作品と見なした。

ただし、インタビューで協力者が語っているコラージュの制作方法も踏まえて評定するように留意した。

##### ②内容分析

先行研究（赤塚，2003；申，2015；杉浦，1994）を参考にして「種別」、「内容カテゴリー」、「具体的内容」に分類して集計した。



## (2) インタビューの分析方法

語られた子どもイメージの内容を捉えるために、木下 (2016) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA) によるインタビューの分析を行った。木下 (2016) によると、M-GTAは、データを切片化しないため文脈が破壊されることなく、その文脈に反映されるその人の内的な動きなどを理解できる方法であると述べている。これは、コラージュ制作を通じて表出された子どもイメージをより具体的に捉えることができるので、本研究においては重要な意味を成すと思われる。

次のような分析手続きを行った。インタビューで得られた録音データを文字に起こして、それを言語データとして扱った。そして、本調査の分析テーマに関連する言語データの内容を見つけ出し、それを一つの具体例として抜き出して概念を生成した。このとき、具体例は他のデータからも説明できるものを選び、その具体例と対極的な位置にあるものを対極例として、類似的な位置にあるものを類似例として扱い、比較検討できるように分析ワークシートにまとめた。

このとき、「概念名」、「定義」、「具体例」、「理論的メモ」を記入項目として扱った。ここで、具体例が豊富に出てこないものは有効な概念ではないと判断して、棄却もしくは別の概念に包括することを検討した。こうして、解釈が恣意的にならないように生成された概念と他に生成された概念との関係を、それぞれの概念ごとに検討して複数の概念が関係するカテゴリーへ体系化し、そのカテゴリーの相互関係から分析結果をまとめた。

## 第IV章 結果

### 第1節 コラージュ作品に関する分析結果

子どもイメージをテーマとしたコラージュ作品を理解するために、形式分析と内容分析を行ったところ、次のような結果が得られた。

### 第1項 形式分析

本研究では、子どもイメージを表現するときどのような素材の扱い方をしているか検討することを目的として、コラージュ全体の特徴に関する項目、素材の切り方に関する項目、素材の貼り方に関する項目といった、形式的な特徴を把握できるような項目を設けて分析した。

その結果、20名全ての協力者が横向き「台紙方向」でコラージュを制作し、素材の使用枚数である「切片数」の平均は男女ともに16枚であり、作品における「余白」の平均は400.6 cm<sup>2</sup>で画用紙の39%を占め、素材が画用紙から「はみ出し」たものは7作品に見られ、評定者に「主な色彩」として最も選ばれたものは青色(35%)の7作品であった。このとき、男女による出現頻度の差や使用頻度の差をみるためにそれぞれ検定にかけたが、「切片数」[ $t = 1.80, df = 18, n.s.$ ], 「余白」[ $t = 0.34, df = 18, n.s.$ ], 「はみ出し」[Fisherの直接確率計算法, 両側検定,  $p = 0.356$ ], 「主な色彩」[Fisherの直接確率計算法, 両側検定,  $p = 0.64$ ]の全ての項目において有意差また偏りは認められなかった。

また、最も多く見られた切り方は「四角形」(20名, 100%)で、次いで「物の形」(15名, 75%), 「丸型」(9名, 45%)となった。このとき、男女による素材の切り方の差をみるためにFisherの直接確率計算法(両側検定)を行ったが、「三角形」[ $p = 1.00$ ], 「多角形」[ $p = 0.54$ ], 「丸型」[ $p = 0.67$ ], 「物の形」[ $p = 0.11$ ], 「不定形」[ $p = 1.00$ ], 「創作」[ $p = 1.00$ ]の全ての項目において偏りが認められなかった。

そして、最も多く見られた貼り方は「横転貼り」(18名, 90%)で、次いで「重ね貼り」(16名, 80%)であった。しかし、特徴的な切り方であると思われた「結合」, 「分裂」, 「枠のある切り抜き」も1~2作品で出現した。このとき、男女による素材の貼り方の差をみるためにFisherの直接確率計算法(両側検定)を行ったが、「重ね貼り」[ $p = 0.26$ ], 「逆さ貼り」[ $p = 0.50$ ], 「横転貼り」[ $p = 0.15$ ], 「結合」[ $p =$

1.00], 「分裂」 [ $p = 1.00$ ], 「枠のある切り抜き」 [ $p = 0.15$ ] の全ての項目において偏りが認められなかった。

## 第2項 内容分析

統制した素材の出現について把握するため、使用された素材の数量を集計した。なお、「色画用紙」については切片数を数えたが、その他の種別は出現の数量で数えた。その結果、「自然、季節」は14枚(4.3%), 「植物」は49枚(15.1%), 「建築物、風景」は6枚(1.8%), 「物体」は59枚(18.2%), 「食べ物」は9枚(2.8%), 「乗り物」は2枚(0.6%), 「動物」は42枚(13%), 「イラスト」は100枚(30.9%), 「文字」は9枚(2.8%), 「色画用紙」は34枚(10.5%)の合計324枚の素材を使用していたことが分かった(表1)。

また、使用された素材の種別を順位づけしたところ、次のような順になった。なお、各種別において割合を多く占めている内容カテゴリーを括弧内に示した。1位が「イラスト(マーク28枚, 表情21枚, 感情の様子23枚)」, 2位が「物体(おもちゃ20枚)」, 3位が「植物(花42枚)」, 4位が「動物(食肉目13枚, 昆虫12枚)」, 5位が「色画用紙(カナリヤ色15枚)」, 6位が「自然・季節(天気・太陽と月8枚)」, 7位が「食べ物(お菓子5枚)」と「文字(平仮名5枚)」, 8位が「建築物・風景(施設の内部2枚)」, 9位が「乗り物」のとなった(表2)。このとき、最も使用頻度が高かった「イラスト」の男女による使用頻度の差をみるために検定にかけたところ、偏りが認められないことが分かった[Fisherの直接確率計算法, 両側検定,  $p = 0.67$ ]。

さらに、使用された素材の具体的内容の順位づけをしたところ、1位が「花」(42枚, 13%)であり、2位が「カナリヤ色」(15枚, 4.6%)であり、3位が「足跡マーク」(9枚, 2.8%)であり、4位が「目」(8枚, 2.5%)であり、5位が「淡黄色」(6枚, 1.9%)であり、6位が「空」, 「絵の具」, 「クワガタ」, 「犬」, 「嬉しい顔」(5枚, 1.5%)であり、11位が「レゴブロック」,

「サッカーボール」, 「観覧車」, 「ぴこーん」, 「矢印マーク」, 「うす桃色」, 「水色」(4枚, 1.2%)の順となった(表3)。このとき、最も使用頻度が高かった「花」の男女による使用頻度の差をみるために検定にかけたところ、偏りが認められないことが分かった[Fisherの直接確率計算法, 両側検定,  $p = 0.67$ ]。

## 第2節 インタビューの分析結果

語られた子どもイメージの内容をM-GTAを用いて分析したところ、次のような結果が得られたので、それを結果図に示した(図1)。なお、本文では【 】はカテゴリー, [ ]は概念を表すことにした。

コラージュ制作とインタビューを通じて子どもイメージが表出された。それは、子どもは【未成熟】の状態であり、そのような状態であるとき【子ども独自の世界体験】・[活動性の高さ]・[好奇心]・[明るく元気な存在]といった子どもの在り方が浮かび、【親から受ける影響】というような外界から働きかけがあって、子どもが【成長】していくというものであった。

【未成熟】は、[未成熟さ]・[感情の未分化]・[考えの浅さ]というような、子どもの成長しきれていない様子が示された。[未成熟さ]では、「大人って自分だと、花がもう咲いたイメージがあるんですよ。でも、子どもだとまだ蕾のまんまで、まだ咲ききってないみたいなイメージだったんで、」(No.4)や、「この蕾、まあ、子どもはまだまだ大人になれない蕾のままだなあとって、」(No.14)など、子どもは成長の萌しを感じる存在であることが表された。また、類似例として、「(カブトムシを)捕り行ったりとか、みんなで。とか、ありましたね。こっそり。誰にもばれないように、みんなで行って、で、怒られて、みたいな。」(No.4)や、「子どもの頃刺されて、めっちゃ痛い目見てるんで、蜂の巣叩いて。3ヶ所くらい一気にやられたんですよ。」(No.12)という、子どもは本能の赴くままに行動してしまうことも表された。[感情の未分化]では、コラージュの表



表1 使用された素材の種別、内容カテゴリー、具体的内容とその割合

種別	内容カテゴリー		具体的内容					
名称	数	(%)	名称	数	(%)			
自然	11	(3.4)	天気・太陽と月	8	(72.7)	雨	1	(9.1)
						空	5	(45.5)
						空と太陽	1	(9.1)
			月	1	(9.1)			
			宇宙	3	(27.3)	地球	3	(27.3)
季節	3	(0.9)	春	1	(33.3)	桜と菜の花	1	(33.3)
			夏	1	(33.3)	花火大会	1	(33.3)
			冬	1	(33.3)	クリスマス	1	(33.3)
植物 (花/木/葉)	49	(15.1)	種子植物・裸子植物・被子植物, 単子葉類と双子葉類, 合弁花と離弁花			赤色の花	6	(12.2)
						桃色の花	7	(14.3)
						紫の花	4	(8.2)
						青色の花	6	(12.2)
						緑色の葉がある木	3	(6.1)
						緑色の葉	3	(6.1)
						緑色の食虫植物	1	(2)
						黄色の花	10	(20.4)
						黒色の花	1	(2)
						白色の花	8	(16.3)
						建築物	4	(1.2)
施設の外部	2	(50)	タイル	1	(25)			
			城の外壁	1	(25)			
			施設の内部	1	(25)	螺旋階段	1	(25)
風景	2	(0.6)	美術	1	(50)	中国の龍	1	(50)
			自然物	1	(50)	巨大な岩	1	(50)
物体	59	(18.2)	医療用品	1	(1.7)	体温計と診断書	1	(1.7)
			おもちゃ	20	(33.9)	おはじき	2	(3.4)
						クマのぬいぐるみ	3	(5.1)
						サルのぬいぐるみ	3	(5.1)
						しゃぼん玉	3	(5.1)
						パペット人形	3	(5.1)
						ミニカー	2	(3.4)
						レゴブロック	4	(6.8)
						楽器	3	(5.1)
						ピアノ	1	(1.7)
						マイク	1	(1.7)
			公共の場にある道具	2	(3.4)	信号機	1	(1.7)
						望遠鏡	1	(1.7)
			雑貨	6	(10.2)	仮面	1	(1.7)
						キーホルダー	1	(1.7)
						宝箱	1	(1.7)
						ハートの箱	1	(1.7)
						プレゼント	2	(3.4)
			スポーツ用品	5	(8.5)	サッカーボール	4	(6.8)
						バドミントンの羽	1	(1.7)
			日用品	4	(6.8)	タオル	1	(1.7)
電球	1	(1.7)						
フォークとナイフ	1	(1.7)						
目覚まし時計	1	(1.7)						
筆記用具	9	(15.3)	色鉛筆	3	(5.1)			
			絵の具	5	(8.5)			
			筆	1	(1.7)			

		本	2 (3.4)	外国語書籍	1 (1.7)
				マンガ本	1 (1.7)
		遊具	7 (11.9)	観覧車	4 (6.8)
				ブランコ	3 (5.1)
食べ物	9 (2.8)	お菓子	5 (55.6)	グミ	1 (11.1)
				ケーキ	2 (22.2)
				マカロン	2 (22.2)
		中華料理	1 (11.1)	からあげ	1 (11.1)
		洋食料理	1 (11.1)	ハンバーグ	1 (11.1)
		和食料理	2 (22.2)	盛られた白米と卵	1 (11.1)
				残された白米	1 (11.1)
乗り物	2 (0.6)			電車	1 (50)
				飛行機	1 (50)
動物	42 (13)	海獣類	4 (9.5)	アザラシ	1 (2.4)
				イルカ	1 (2.4)
				シロクマ	2 (4.8)
		魚類	1 (2.4)	エイ	1 (2.4)
		齧歯類・双前歯目	7 (16.7)	ウサギ	2 (4.8)
				コアラ	1 (2.4)
				ハムスター	1 (2.4)
				モルモット	2 (4.8)
				リス	1 (2.4)
		昆虫	12 (28.6)	クワガタ	5 (11.9)
				毛虫	1 (2.4)
				セミ	2 (4.8)
				チョウ	3 (7.1)
				トンボ	1 (2.4)
		食肉目	13 (31)	犬	5 (11.9)
				トラ	3 (7.1)
				猫	2 (4.8)
				猫の目	1 (2.4)
				ライオン	2 (4.8)
		鳥類	4 (9.5)	インコ	1 (2.4)
				フクロウ	3 (7.1)
		両生類	1 (2.4)	カエル	1 (2.4)
イラスト	100 (30.9)	顔のパーツ	9 (9)	目	8 (8)
				口	1 (1)
		表情	21 (21)	嬉しい顔	5 (5)
				怒る顔	2 (2)
				驚きの顔	1 (1)
				悲しい顔	3 (3)
				困る顔	1 (1)
				微妙な顔	3 (3)
				普通の顔	3 (3)
				ほっこりな顔	3 (3)
		感情の様子	23 (23)	あっ	2 (2)
				あせあせ	1 (1)
				いらいら	3 (3)
				きらきら	2 (2)
				ぐるぐる	2 (2)
				どんより	1 (1)
				ぱぱんっ	3 (3)
				ぴこーん	4 (4)
				びゅー	1 (1)
				ぼんっ	2 (2)
				わはは	2 (2)

	記号	16 (16)	シャープ	2 (2)	
			ト音記号	3 (3)	
			フラット	2 (2)	
			4分休符	3 (3)	
			8分音符	3 (3)	
			二連8分音符	3 (3)	
	じゃんけん	3 (3)	ゲー	1 (1)	
			チョキ	1 (1)	
			パー	1 (1)	
	マーク	28 (28)	足跡マーク	9 (9)	
傷マーク			1 (1)		
天気マーク-太陽			2 (2)		
天気マーク-月			1 (1)		
天気マーク-雲			1 (1)		
はてなマーク			3 (3)		
ハートマーク			3 (3)		
びっくりマーク			3 (3)		
雫マーク			1 (1)		
矢印マーク			4 (4)		
文字	9 (2.8)	平仮名	5 (55.6)	き	1 (11.1)
				す	1 (11.1)
な	1 (11.1)				
の	1 (11.1)				
も	1 (11.1)				
英字	4 (44.4)			E	1 (11.1)
				I	1 (11.1)
				K	1 (11.1)
				L	1 (11.1)
色画用紙	34 (10.5)			うす桃色	4 (11.8)
				淡黄色	6 (17.6)
				カナリヤ色	15 (47.1)
				水色	4 (11.8)
				藤色	3 (8.8)
				暗灰色	2 (5.9)

表2 使用された素材の種類の順位

順位	使用数	(%)	種別
1位	100	(30.9)	イラスト (マーク28枚, 感情の様子23枚, 表情21枚)
2位	59	(18.2)	物体 (おもちゃ20枚)
3位	49	(15.1)	植物 (花42枚)
4位	42	(13)	動物 (食肉目13枚, 昆虫12枚)
5位	34	(10.5)	色画用紙 (カナリヤ色15枚)
6位	14	(4.3)	自然・季節 (天気・太陽と月8枚)
7位	9	(2.8)	食べ物, 文字 (お菓子5枚)
8位	6	(1.8)	建築物・風景 (施設の内部2枚)
9位	2	(0.6)	乗り物

表3 使用された具体的内容の順位

順位	使用数	(%)	種類	(カテゴリー)
1位	42	(13)	花	(植物)
2位	15	(4.6)	カナリヤ色	(色画用紙)
3位	9	(2.8)	足跡マーク	(イラスト—マーク)
4位	8	(2.5)	目	(イラスト—顔のパーツ)
5位	6	(1.9)	淡黄色	(色画用紙)
6位	5	(1.5)	空	(自然—天気)
6位	5	(1.5)	絵の具	(物体—筆記用具)
6位	5	(1.5)	クワガタ	(動物—昆虫)
6位	5	(1.5)	犬	(動物—食肉目)
6位	5	(1.5)	嬉しい顔	(イラスト—表情)
11位	4	(1.2)	レゴブロック	(物体—おもちゃ)
11位	4	(1.2)	サッカーボール	(物体—スポーツ用品)
11位	4	(1.2)	観覧車	(物体—遊具)
11位	4	(1.2)	ぴこーん	(イラスト—感情の様子)
11位	4	(1.2)	矢印マーク	(イラスト—マーク)
11位	4	(1.2)	うす桃色	(色画用紙)
11位	4	(1.2)	水色	(色画用紙)

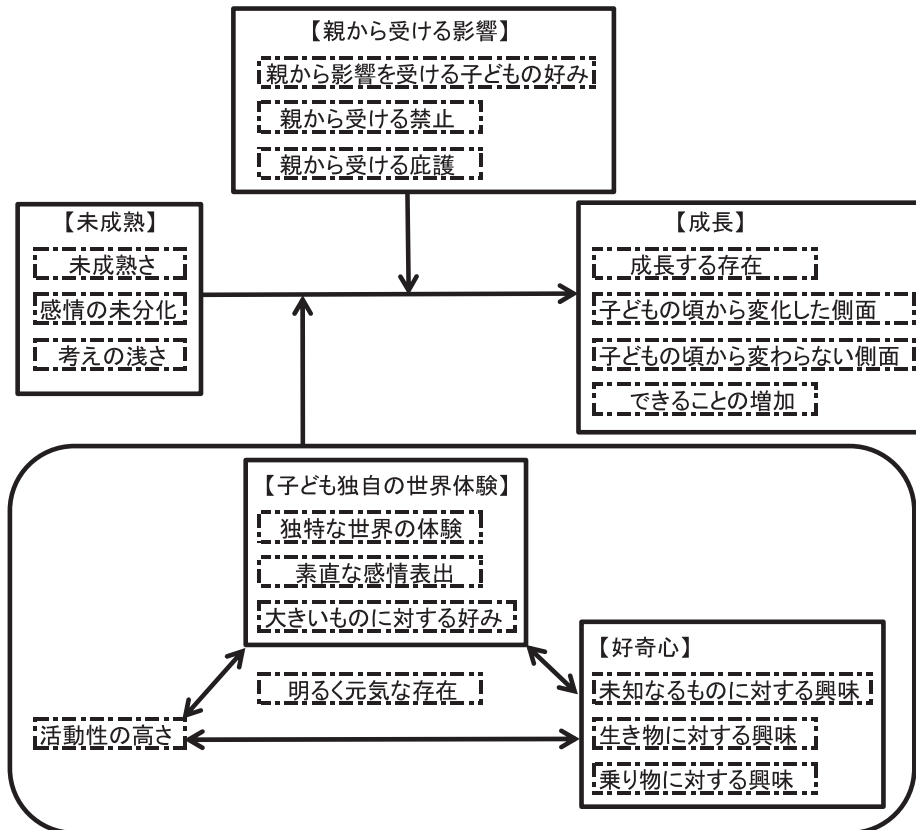


図1 コラージュ制作を通じて表出された子どもイメージの結果図

現としてビックリした顔や笑顔のイラストなどをたくさん貼り付けていた人が、「表情とか、感情とか、成長だと思いました。」(No.7)と述べたことや、「子どもころは、これがどういう感情だったか分かんないから」(No.14)、「自分の想像したのが幼児とか、そういう保育園生時代のときで、なんていうか、かなりこうまっさらな状態で、そこからこう…興味あるものが好きで、なんか気持ち悪いもの見たら嫌いっていう感情が、またそこからこう別の方に派生っていうか、そんな感じで生まれてる、と考えました」(No.17)など、子どもの未分化な感情が分化していく様子が表された。[考えの浅さ]では、「ちっちゃいときからあんまりいろいろ考えたことがなくて、」(No.3)や、地球が貼られ、子どものイメージから一番遠いと語った人がその説明で、宇宙に憧れるけれど、「自分が、なんだろ、どこに住んでるんだ」(No.15)と述べたことや、「ちっちゃい頃って何も考えてなかったなあって、好きなものを並べるだけだったりとか」(No.13)など、子どもは限られた範囲しか考えていないことが表された。

【子ども独自の世界体験】では、[独特な世界の体験]・[素直な感情表出]・[大きいものに対する好み]といった、子どもは大人と異なる外界体験をしている様子が示された。[独特な世界の体験]では、「…小さいときって小さいから、いろいろ、葉っぱが落ちてきたりするじゃないですか。それでよく、よくじゃないけどまあ、頭にあったのを結構覚えてて、なんか降ってたなあ、みたいな感じで、(色画用紙を)切りました。」(No.8)や、「普段は見ないけどちっちゃい子といると、『ここに花咲いてるよ』とか言われて、あっ、咲いてるな、みたいな、感じですよ。」(No.9)など、子どもは大人とは異なる視点で外界を体験していることが表された。[素直な感情表出]では、「幼稚園生は…大人よりももっと感情を表に出したりとか。…こっ、えー、嫌いなのは嫌いと言ったりとかしていたので」(No.18)や、「子どもはやっぱり、自分を取りつく(ろ)ったりあんまりしな

いと思うので、正直に表情豊かな感じが、しますね。」(No.20)など、子どもは抱いた感情を素直に表現することが表された。[大きいものに対する好み]では、「(シロクマは)大きくて、迫力があって、ここに合うかなって思ったんで置きました。」(No.9)や、「(ライオンやトラは)…おっきくて、かっこよくて、強いところ…に、憧れてました。」(No.13)など、子どもは自分より大きいものに対して憧れや興味を抱くことが表された。

【活動性の高さ】では、「とりあえず、『外で遊ぼう』って言って、『今日は何するー?』って。それで、『サッカーだ』、『釣りだ』、『虫捕りだ』って感じでしたな。」(No.2)や、「自分は小さい頃、あの一、サッカーとか、好きでやってて。(中略)で、そのイメージの中で、子どもたちって、自分の中のイメージは、えっと一、いろんなスポーツとか活発にして、」(No.4)、「昔はもう、リレーとか鬼ごっこばかりやってました。」(No.5)など、子どもは外で遊ぶ体験が多いことが表された。

【好奇心】では、[未知なるものに対する興味]・[生き物に対する興味]・[乗り物に対する興味]といった、子どもが興味や関心を向ける対象が示された。[未知なるものに対する興味]では、「足跡は何だろうな…、なんか、こう、なんていうんだろ、いなくてもわくわくしてこう、探したりっていうのじゃないけど、足跡だけじゃなくて、こう、あるじゃないですか。いたんだらうな、みたいな、そういうので結構、そういうところを探し回ってたから。」(No.8)や、「日本の(城のような)ものは結構身近にあるんですけど、こういう西洋とか、そういうのはあんまりないので、行く機会がないので、あったらいいかなあっていう感じです。」(No.19)など、子どもは体験したことないものに対する興味を抱くことが表された。[生き物に対する興味]では、「犬は本当に好きなんで。(中略)動物系、結構好きなんで、犬とか猫とか好きなんで、貼りました。(中略)結構ちっちゃい頃、こういう爬虫類系も好きだったん

で。動物全般、結構好きなんで、で、ワニ、かっこいいなあって。(中略) 虫もねー、好きなんすよ。生き物系…。虫、ちっちゃい頃から捕ったり…。」(No.2) や、「小学生はたぶん、犬が好きの人と猫が好きの人と、あと結構ウサギとかも人気があったなあとって、それを入れて、あとイルカも、絶対水族館行ったら人気だっというので入れて。(中略) で、クワガタとかチョウチョとかも、女の子も男の子も人気なもので。」(No.15) など、子どもはさまざまな動物や虫に対して興味を抱くことが表された。[乗り物に対する興味] では、「自分もそうだったんですけど、プラレールとかあると喜ぶじゃないですか。だから、そういう動くものが好きなのかなって思って、貼ってみました。」(No.18) や、「電車は…まあ、女子はどうか分からないですけど、男子だったら、『やったー、電車だけ！かっこいいぜ！』って単純思考で喜ぶんじゃないかなと思ったので。」(No.18) など、動いている乗り物に対する興味が表された。

[明るく元気な存在] では、「子どもたちには元気にいてほしいし、明るくいてほしいと思ったので。」(No.4) や、「(ヒマワリは) 太陽を思い浮かべるっていう花なので、元気な感じを出したくて。」(No.10)、「極力、暗くならないように明るい、明るい色になるように。で、まず、空から選んで。で、全体を明るくしようって。〈暗くならないようにというの？〉なんか、子どもが、極力、明るくいてほしいから。なんか、常に笑ってほしいみたいなの。」(No.11) など、子どもは明るくて元気が感じられるポジティブな存在であることが表された。しかし、その対極例として、「結構戦闘機みたいな画像があって、どうしようかなって思ったんですよ、一回。(なぜですか?) なんか、そういう戦争とかって、結構子どもが犠牲になってるから、そういうのを基調にしてやろうかなって思ったんですけど、それだとちょっと、…気持ち悪…暗くなっちゃうの。」(No.4) という、素材をネガティブに捉えてしまうと、子どもが過酷な状況を体験する連想が表された。

【親から受ける影響】は、[親から影響を受ける子どもの好み]・[親から受ける禁止]・[親から受ける庇護]といった、子どもは親からの影響を大きく受けていることが示された。[親から影響を受ける子どもの好み]では、「私自身の目標が『毎日笑顔で』っていう目標を、中学の2年生ぐらいから決めて。で、お母さんがヒマワリ好きで…。そうなりたいなあって思って。できるだけ笑顔でいたって。」(No.10) や、「お母さんヒマワリ大好きで、自分のメールアドレスとかにもヒマワリって使っちゃうくらい好きなんで、たぶんそれが原因で、僕も使っちゃったのかなあとと思いますね。」(No.12) など、子どもは親の好みに影響を受けていることが表された。また、類似例として、「昔からなんか、んん…弟の方がアイデアがあって、創造的なんです。なんか、それと比べられるのが多くて。」(No.15) といった、子どもは大人から受ける評価を気にすることも表された。[親から受ける禁止]では、「スズランとかも結構好きだったんですけど、スズランも『毒あるから触っちゃダメよ』って言われて。」(No.1) や、「(ペットショップに) 行くぐらい、もうほんとに(犬が) 好きなんすよ。飼いたいんすよねー。親には『あんたが一番手かかるからダメだ』って。」(No.2) など、子どもの頃に親から禁止されていること、または、子どもの頃から現在に至るまで親から禁止されていることが表された。また、類似例として、「テーブルマナーは、えっと、小さい頃とか、親から言われることが多いと思うので。で、マナーを表してるかなあと。」(No.16) といった、子どもは親から躾けられることも表された。[親から受ける庇護]では、「(コラージュの制作にあたって) 一番手がかりにしたのは、えっと…電車とか乗ってるときに、お母さんが子どもをなんか、世話してる様子とか。」(No.11) や、「家族に連れられて、仲良く(遊びに) 行ってたなあみたいな。」(No.14) など、子どもは親に守られる存在であることが表された。

【成長】は、[成長する存在]・[子どもの頃か



ら変化した側面]・[子どもの頃から変わらない側面]・[できることの増加]といった、子どもがこれから成長していく様子が示された。[成長する存在]では、「…子どもって思っ、一番、一番考えたのが、どんどん成長してくことだから。何十年も。」(No.6)や、「真ん中に階段の、画像を置いて、えっと、子どもは一つ一つ階段を登って成長して行くのかなあと思いました。」(No.16)など、子どもは徐々に成長していく存在であることが表された。[子どもの頃から変化した側面]では、「昔は人形好きだったけど、今は別にそうでもないし、集めるほどでもないってなるじゃないですか。そういうへんっ変化？ちっちゃい頃と今の変化みたいな。」(No.6)や、「…昔、小学生の頃とか、は、あ、全然興味なかったものも、今は結構、興味があるなあとかと思う写真が結構ありましたね。」(No.15)など、子どもの頃と現在では変化している部分があることが表された。しかし、一方では、[子どもの頃から変わらない側面]という、「…ちっちゃい頃から、ホラー映画とか苦手なんですけど、なんか知らないけど、怖いものとか、なんか結構好きで、」(No.1)や、「…動物がちっちゃい頃から好きだったんで、動物園がとにかくすごい好きで。」(No.13)など、子どもの頃から現在に至るまで変わらない部分もあることが表された。[できることの増加]では、「小学校3年生くらいになってくると、なんか、(中略)気持ちを伝えられる、(中略)ちゃんと友達と会話できるみたいな、そんなイメージがあって、」(No.4)や、「何も知らない状態からだんだん知っていくみたいなイメージ」(No.7)など、子どもは成長するとともに能力が向上していくことが表された。また、類似例として、「…ジャンケンが子どもがするかなって。〈どういった子どもがよくすると？〉…プリンを取り合ったりとか。」(No.20)と、一つのプリンをジャンケンでだれが食べるか決めるということから、子どもは成長していく中で問題を解決できるようになることも表された。

このように、コラージュ制作を媒介にしてイ

ンタビューを行ったところ、通常は成人と比べて言語化が難しいと考えられる高校生においても子どもイメージが豊かに表出された。

## 第V章 考察

### 第1節 コラージュ作品に関する考察

#### 第1項 形式分析

本研究では、子どもイメージを表現するときにもどのような素材の扱い方をしているか検討することを目的として、コラージュ全体の特徴に関する項目、素材の切り方に関する項目、素材の貼り方に関する項目といった、形式的な特徴を把握できるような項目を設けて分析した。その結果と、先述した先行研究(西村, 2015; 杉浦, 1994; 滝口ら, 1999)の結果と比較すると、関心の広がりやイメージの出力などに関係すると思われる「切片数」、精神活動の中での表出力や表現力などに関係すると思われる「余白」、自我の統合性などに関係すると思われる「はみ出し」、内的表現力などに関係すると思われる「重ね貼り」、表現力や美意識などに関係すると思われる「主な切り方」それぞれに性差が見られなかった。したがって、思春期男女は、子どもイメージという課題のもとでコラージュ制作をすると、男女差はあまり現れず、似たような表現をしていたことがわかる。

また、「主な色彩」についても杉浦(1994)の結果とは異なる青色が多く見られた。色の象徴論は多義的であるが、浜畑(1989)は、青色の持つ象徴的な意味内容を、無力衝動、休息と停止、服従と義務感、従順を表すと述べている。この見解に従うならば、子どもイメージをテーマとしたコラージュ作品に青色が「主な色彩」として選ばれたのは、生まれてきた子どもが親の下で育っていく様子を表しているように捉えることもできるかもしれない。

#### 第2項 内容分析

本研究では、子どもイメージを表現するときにも使用される素材を検討することを目的とし

て、内容的特徴を把握できるように分析した。

まず、「イラスト」の使用が多く、特に喜怒哀楽のような表情や感情表現の擬態語などが多かったことから、子どもイメージを具現化するときは感情表現が重視されたと思われる。なお、この結果は、総務省（2017）の調査結果を踏まえて検討する必要がある。この調査によると、2017年のスマートフォンの普及率は75.1%となっており、2000年の普及率と比較すると急激に増加していることが分かる。また、総務省（2015）の最近約1年以内に利用した経験のあるSNSを尋ねた調査では、LINE（37.5%）、Facebook（35.3%）、Twitter（31.0%）の順で利用されており、SNSの種類に関わらず利用される機会があることが分かる。このような機器の普及率が全体的に進んでいることや、SNSの利用率が一定数以上あるということから、高校生もSNSに関わる機会がごく自然な状況になっているといえる。そのため、高校生が他者との交流時に心情を伝える際、顔文字やスタンプといったイラストで表現することが日常的と推測できるので、本研究においてもそれらが反映されたと考えられる。

次に、先行研究（西村、2015；杉浦、1994；滝口ら、1999）では、テーマが課されていないコラージュ作品では男女それぞれが各々の興味の対象を貼る傾向にあったが、本研究結果では男女ともに「おもちゃ」の素材の使用が多かった。これは、制作者が子どもの視点に立って興味ある対象を貼っているからだと思われる。制作者は作品に用いた素材の説明において、制作者の幼少時代の体験を語っていたことを踏まえると、制作者は子ども時代の自分が当時感じていたことや、今の自分が子ども時代を振り返って感じていることを表しているように考えられる。

また、「花」が多く使用されて、インタビューでは、子どもの成長の可能性を語っていたことから、成長していく子どもイメージの反映と考えられる。

このような考察に加えて、素材が示すより具体的な意味を理解する必要があると思われるた

め、以下の方法を用いてその意味を検討する。

#### (1) ロールシャッハ・テストとの比較

コラージュ作品を理解する際、そこに使われている素材をロールシャッハ・テストの解釈に倣って作品を捉えることが先行研究（今村、2006；西村、2015；杉浦、1994）で試みられている。そこで、本研究においても、使用された素材の具体的内容に従ってその意味を考えてみる。

本研究で使用された具体的内容の順位を、片口（2015）によるロールシャッハ・テストで用いられる反応内容と照らし合わせてみた。その結果、「花」は花反応Plf、「カナリヤ色」・「うす桃色」・「水色」は色彩反応C、「足跡マーク」は非現実的動物部分反応（Ad）、「目」・「嬉しい顔」は非現実的人間部分反応（Hd）、「空」は自然反応Na、「絵の具」・「レゴブロック」・「サッカーボール」は物体反応Obj、「クワガタ」・「犬」は動物反応A、「びこーん」・「矢印マーク」は抽象反応Abst、「観覧車」は建物反応Archに置き換えることができるだろう。しかしながら、置き換えた反応内容のうち（H）とA以外は一義的な解釈を与えられるほどの実証的な裏付けがないため、言及することができない。そこで、可能な範囲で検討する。

まず、非現実的人間反応（H）は他人に対する関心や感受性を反映するが、現実的な対人関係ではなく、空想的な世界に逃避する傾向を示すという。しかし、児童における（H）の出現は、子どもらしい空想の所産とみるべきであるとも述べている。本研究では、素材から人間また人間類似のカテゴリーを除外しているが、「イラスト」の中に、（Hd）に相当すると思われる「目」や「嬉しい顔」などの絵文字類が含まれていた。

また、動物反応Aは紋切り型の指標として扱われ、不安や抑うつ気分によってこの割合が増大するので、成人に多く見られる場合は現実回避的で未成熟などの傾向として捉えられるという。言い換えれば、Aの示す状態は子どもらしい空想の世界を反映すると述べている。本研究では、Aまた（Ad）に相当すると思われる「足

跡マーク]、「クワガタ」,「犬」などの動物類を含めた。

よって、このような素材が子どもイメージを表現するときに使用されたということは、制作者の子どもらしい部分が動き、その結果が、コラージュ作品に表れたと考えることができるだろう。

## (2) 具体的内容の使用頻度上位にある素材とインタビューとの関連

コラージュ制作後に行ったインタビューでは、選んだ素材に対する想いを語った者が多かった。そこで、先述した種別の使用頻度上位3位までの素材（イラスト：マーク・感情・表情、物体：おもちゃ、植物：花）と、インタビューで語られた素材の意味を検討したところ、どの素材についても、子どもに対して抱く印象や、制作者の子ども時代の実体験、その体験時に抱いていた感情などの制作者の心の動きが表れていた。したがって、子どもイメージを表現するときに使用される素材は、制作者の子どものときの記憶や子どもへの思いが影響を与えていると考えられる。

## 第2節 インタビューの考察

本研究では、高校生がどのような子どもイメージを抱いているかを探索的に検討することを目的として、M-GTAによって導かれた結果を考察する。

### 第1項 未成熟

まず、子どもの〔未熟さ〕や〔感情の未分化〕,〔考えの浅さ〕というような、子どもが成長しきれていない様子また子どもの成長の可能性を示す【未成熟】な状態が表された。

〔未熟さ〕については、「大人って自分だと、花がもう咲いたイメージがあるんですよ。でも、子どもだとまだ蕾のまんまで、まだ咲ききっていないみたいなイメージだったんで、」(No.4) や、「この蕾、まあ、子どもはまだまだ大人になれない蕾のままだなあと思って、」(No.14) など、子どもと大人とを比較して、そ

の未成熟的な状態について語られた。これは、大人と比べて、子どもが成長していくときの変化が強く感じられる存在であるという側面も示していると考えられる。また、類似例において、「子どもの頃刺されて、めっちゃ痛い目見てるんで、蜂の巣叩いて。3ヶ所くらい一気にやられたんですよ。」(No.12) というような、子どもは見通しが立てられないことを語っていた。子どもは未成熟であるので行動を優先させてしまうイメージがあることを示している。

また、〔感情の未分化〕については、「表情とか、感情とか、成長だと思いました。」(No.7) や、「子どもころは、これがどういう感情だったか分かんないから」(No.14)、「自分の想像したのが幼児とか、そういう保育園生時代のときで、なんていうか、かなりこうまっさらな状態で、そこからこう…興味あるものが好きで、なんか気持ち悪いもの見たら嫌いっていう感情が、またそこからこう別の方に派生っていうか、そんな感じで生まれてる、と考えました」(No.17) など、子どもの感情は成長と共に分化していくが、子どもの頃の未分化さが印象的であるようなことを語っていた。子どもの未分化さと成長の可能性の意味を捉えて表現しているように感じられる。

また、〔考えの浅さ〕については、「ちっちゃいときからあんまりいろいろ考えたことがなくて、」(No.3) や、「自分が、なんだろう、どこに住んでるんだ」(No.15)、「ちっちゃい頃って何も考えてなかったなあって、好きなものを並べるだけだったりとか」(No.13) など、子どもはあまり物事を深く考えず、限られた範囲でしか考えていないことが語られた。これは、子どもが未成熟であるために、思考力の限界を感じているように思われる。

このように、子どもは【未成熟】で、ときに行動優先になるが、成長の可能性を感じられる存在であるといえるだろう。

## 第2項 子ども独自の世界体験，活動性の高さ，好奇心，明るく元気な存在

次に，子どもが【未成熟】な状態から成熟に向かっていくときに，【子ども独自の世界体験】，【活動性の高さ】，【好奇心】，【明るく元気な存在】というような，子どもの在り方が示された。

### (1) 子ども独自の世界体験

まず，子どもは【独特な世界の体験】をしつつ，その体験感覚などを【素直な感情表出】によって他者に伝えて，また，子どもは【大きいものに対する好み】があるような様子を示す【子ども独自の世界体験】が表された。

コラージュ表現を媒体にしたからこそ，具体的に子ども独自の世界体験について語られることになったように思われる。【独特な世界体験】については，「…小さいときって小さいから，いろいろ，葉っぱが落ちてきたりするじゃないですか。それでよく，よくじゃないけどまあ，頭にあったのを結構覚えてて，なんか降ってたなあ，みたいな感じで，（色画用紙を）切りました。」(No.8)と，色画用紙を切って貼り付けることを通して，小さい子供の頭に降り注ぐ葉への思いがよみがえっていて，具体的に語られたと思われる。「普段は見ないけどちっちゃい子といると，『ここに花咲いてるよ』とか言われて，あっ，咲いてるな，みたいな，感じですよ。」(No.9)なども，同様だろう。

確かに，子どもは大人とは異なる視点で外界を捉えて体験している。大人からすると日常的な場面であっても，子どもにとっては新奇性の高い場面になるためであると思われる。これは【好奇心】にもつながっていく。

また，【素直な感情表出】については，「幼稚園生は…大人よりももっと感情を表に出したりとか。…こっ，えー，嫌いなものは嫌いと素直に言ったりとかしていたので，貼りました。」(No.18)や，「子どもはやっぱり，自分を取りつくったりあんまりしないと思うので，正直に表情豊かな感じが，しますね。」(No.20)など，未成熟さにもつながっていくけれども，やは

り，子どもは抱いた感情を素直に表現するなかで，世界を十分に体験し，少しずつ社会性も身につけていくのだろう。

また，「(シロクマは)大きくて，迫力があつた」(No.9)とか，「(ライオンやトラは)…おっきくて，かっこよくて，強いところ…に，憧れてました。」(No.13)のように，【大きいものに対する好み】なども，子どもらしい感性が語られていた。子どもは自分より大きいものに対して憧れや興味を抱き，ときに同一化しながら成長していくものである。

### (2) 活動性の高さ

子どもは大人とは異なる世界体験をしているが，その【活動性の高さ】も成長にとって大切な要因である。「とりあえず，『外で遊ぼう』って言って，なん，『今日は何するー?』って。それで，『サッカーだ』，『釣りだ』，『虫捕りだ』って感じでしたね。」(No.2)や，「自分は小さい頃，あの一，サッカーとか，好きでやってて。(中略)で，そのイメージの中で，子どもたちって，自分の中のイメージは，えっと一，いろんなスポーツとか活発にして，」(No.4)，「昔はもう，リレーとか鬼ごっこばかりやりました。」(No.5)など，外で遊ぶ体験の多さが語られた。子どもは活動意欲が高く，体を動かしながら，世界を体験し，自分を体験している。

### (3) 好奇心

子どもは【未知なるものに対する興味】を持ち，【生き物に対する興味】を抱いて【乗り物に対する興味】を示す【好奇心】が表された。

「足跡は何だろうな…っすー，なんか，こう，なんていうんだろ，いなくてもわくわくしてこう，探したりっていうのじゃないけど，足跡だけじゃなくて，こう，あるじゃないですか。いたんだろうな，みたいな，そういうので結構，そういうところを探し回ってたから。」(No.8)で示されるような【未知なるものに対する興味】は，子どもの大切な特徴である。

また，身の回りの生き物との触れ合いも，子どもの生活にはかかせないものである。【生き



物に対する興味]については、「犬は本当に好きなんです。(中略)動物系、結構好きなんです、犬とか猫とか好きなんです、貼りました。(中略)結構ちっちゃい頃、こういう爬虫類系も好きだったんで。動物全般、結構好きなんです、で、ワニ、かっこいいなあって。(中略)虫もねー、好きなんですよ。生き物系…。虫、ちっちゃい頃から捕ったり…。」(No.2)や、「小学生はたぶん、犬が好きなお人と猫が好きなお人と、あと結構ウサギとかも人気があったなあとって、それを入れて、あとイルカも、絶対水族館行ったら人気だっというので入れて。(中略)で、クワガタとかチョウチョとかも、女の子も男の子も人気なもので。」(No.15)など、子どもはさまざまな動物や虫に対して興味を抱くことが語られた。これは、人間以外の生き物が目新しく不思議な対象として認知されるという面もあると思われる。また、ペットとして飼育したい場合は、そのペットを通じて、関係性の体験をしたい欲求があるようにも思われる。子どもは生き物を通じて世界を体験する存在というイメージと考えられる。[乗り物に対する興味]も、子どもの世界を広げるのだろう。

#### (4) 明るく元気な存在

子どもの独特な世界観や体験感覚によって活動性を高め、好奇心が旺盛になっていて、さらに、子どもは「明るく元気な存在」とイメージされた。そこには、子どもは明るく育てほしいという願いも込められていた。

### 第3項 親から受ける影響

次に、子どもが【未成熟】な状態から成熟に向かっていくとき、当然、親からの影響がそこに関与してくる。親が好きなのを好きになり、親が好きなのようになりたいと子どもは思う（[親から影響を受ける子どもの好み]）。そして、好みという形での影響もあれば、[親から受ける禁止]という形での影響もある。その一方で、[親から受ける庇護]が、子どもの成長の守りとなっていることが、高校生の子どもイメージでも表れていた。

このように、【親から受ける影響】では、[親から影響を受ける子どもの好み]や[親から受ける禁止]、[親から受ける庇護]から、親が持つ外界に対する認知に強い関心がある存在、行動が制限されている存在、親に守られるべき存在であることが示されていた。

### 第4項 成長

そして、[成長する存在]や[子どもの頃から変化した側面]、[子どもの頃から変わらない側面]、[できることの増加]により、子どもがこれから【成長】していく様子が表された。

[成長していく存在]というイメージは、階段の比喩で表されたりしていたが、「…子どもって思っ、一番、一番考えたのが、どんどん成長してくことだから。」(No.6)という言葉によく表されている。それは、変化として捉えられていて、好きだったものが、そうでなくなるという形で意識されたり、逆に子どもの頃には興味がなかったものへの興味という形で意識されていた。もちろん、三つ子の魂の比喩にあるように、[子どもの頃から変わらない側面]ということも表現されていた。

また、[できることの増加]も成長を感じさせる面である。言葉で気持ちを伝えられるようになったということ思い出した人もいた。子どもは成長とともに能力を身につけていく存在である。

以上のように、高校生は子どもイメージを豊富に持っていて、それはポジティブな内容であることがコラージュ制作を通じて捉えることができた。言語性は成人のように高くない彼らであるが、コラージュ制作を媒介にした子どもイメージの表出は、内容的に豊富で多岐にわたっていたので、こうした調査方法の有用性が感じられた。

## 第Ⅵ章 まとめ

### 第1節 結論

本研究は、高校生が抱く子どもイメージを検討するために、コラージュ制作とその作品に関するインタビューを行った。その結果、次のような子どもイメージが明らかになった。

#### 【未成熟】

成長の可能性を強く感じられる存在、観念が未成熟である存在、行動優位になってしまう存在、自己の感情の認識が難しい存在、思考する範囲に限度がある存在

#### 【子ども独自の世界体験】

新奇場面の頻度が高い存在、抱いている感情を素直に表出することができる存在、大きなものにあこがれる存在

#### 【活動性の高さ】

独自の世界体験を通じて活動性を高めている存在

#### 【好奇心】

未知なるものの刺激を大きく受ける存在、生き物を通じて世界を体験する存在、活動性を助長させるものに興味を持つ存在

#### 【明るく元気な存在】

明るい存在であると同時に、そうあってほしいと願われる存在

#### 【親から受ける影響】

親が持つ外界に対する認知に強い関心がある存在、行動が制限されている存在、親に守ら

### 注

- 1) 15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの（厚生労働省、2011）。

### 引用文献

赤塚絵里 (2003). 青年期後期女性の「自分」をテーマとしたコラージュ制作における自己受容度の変化、およびその表現. 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 修士論文.  
足成. 写真素材 足成. <http://www.ashinari.com/> (2017年7月15日取得).

れる存在

#### 【成長】

成長していく様子を連想させる存在、成長に伴って変化する部分もあれば変化しない部分もある存在、成長とともに能力を身につけていく存在、身についた能力を発揮する力を持っている存在

以上のように、高校生男女は子どもイメージを豊富に持っていて、その内容はポジティブであった。また、表出された子どもイメージは男女ともに似たものであり、それはまた、成人とも近似的なものであった。

そして、こうした子どもイメージをコラージュ制作で表現するとき、制作者の幼少期の記憶が影響を与えていた。

### 第2節 今後の課題

本研究は、20名の高校生男女を対象として調査したが、コラージュに関する全ての分析において男女差が認められなかった。このことについては、先行研究（西村、2015；杉浦、1994；滝口ら、1999；山根ら、1999）の対象人数より圧倒的に少ないことが関係している可能性もある。しかし、これらの研究はテーマを課していないため、人数だけが影響しているとも言い切れない。そこで、今後の課題としては、本研究と同様に子どもイメージを課題にして、男女ともに人数を増やして調査する必要があると考えられる。

後藤範子 (2005). 保育内容と子ども観. 学事出版.  
浜畑 紀 (1989). 色彩生理心理学. 黎明書房, pp. 43-45.  
池野谷美千代 (1997). コラージュ制作における「女性性」イメージに関する探索的研究——30代女性と中学生女子の制作を通して——. 東京



- 国際大学大学院臨床心理学研究科 修士論文。  
 今村友木子 (2006). コラージュ表現 統合失調症者の特徴を探る. 創元社.
- 今村友木子 (2015-a). 日本コラージュ療法学会第6回大会シンポジウム——コラージュ療法の材料について大切なこと. コラージュ療法学研究, 第6巻1号, pp. 77-79.
- 今村友木子・加藤大樹・二村 彩 (2014). コラージュ療法の材料に関する検討 (2) ——コラージュ療法材料シート集の試作と使用感の検討——. コラージュ療法学研究, 第5巻1号, pp. 43-55.
- 今村友木子・加藤大樹・二村 彩・今枝美幸 (2015-b). コラージュ療法基本材料シート集の開発と今後の活用. 金城学院大学論集人文科学編, 第11巻2号, pp. 21-31.
- 乾 孝・渡部正盛 (1997). 日本<子どもの歴史>叢書1 児童観の歴史/教育的児童観の研究. 久山社.
- 片口安史 (2015). 改訂 新・心理診断法. 金子書房, pp. 189-192, 203-205.
- 河合隼雄 (2000). イメージの特性. 徳田完二・渡辺雄三・田中康裕・織田尚生. 講座心療法3 心理療法とイメージ. 岩波書店, pp. 6-12.
- 河合隼雄 (2013). イメージの心理学. 青土社, pp. 8-42.
- 警察庁 (2015). 平成27年 警察白書. <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h27/index.html> (2017年5月10日取得).
- 小林重順 (2003). カラーリスト——色彩心理ハンドブック——. 講談社, pp. 8-9, 154-155.
- 木下康仁 (2016). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂.
- 厚生労働省 (2009). 平成21年度 全国家庭児童調査. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200001yivt.html> (2017年11月9日取得).
- 厚生労働省 (2011). 平成23年 人口動態統計月報年計 (概数) の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai1/> (2017年5月10日取得).
- 厚生労働省 (2017). 平成29年度版厚生労働省白書. [http://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/](http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/) (2017年11月9日取得).
- 森谷寛之 (2015). コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで. 金剛出版.
- みふねたかし. かわいいフリー素材 いらすとや. <http://www.irasutoya.com/> (2017年7月15日取得).
- NASA. 3D Resources. [Nasa3d.arc.nasa.gov](http://Nasa3d.arc.nasa.gov) (2017年7月15日取得).
- 二村 彩・今村友木子・加藤大樹 (2014). コラージュ療法の材料に関する検討 (1) ——基礎的研究の展望——. コラージュ療法学研究, 第5巻1号, pp. 31-42.
- 西村喜文 (2015). コラージュ療法の可能性——乳幼児から思春期までの発達の特徴と臨床的研究——. 創元社.
- 新村 出 (2008). 広辞苑 第六版 机上版 たーん. 岩波書店.
- 大山 正 (1988). 色とは何か. 江森康文・大山正・深尾謹之介 (編). 色 その科学と文化. 朝倉書店, pp. 20-25.
- 坂田勝亮 (2009). 表色系. 大山 正・齋藤美穂 (編). 色彩学入門 色と感性の心理. 東京大学出版会, pp. 42-49.
- 申 ジンア (2015). コラージュ作品に表現される母性イメージに関する探索的研究——青年期後期および成人期の未婚女性を対象として——. 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 修士論文.
- 杉浦京子 (1994). コラージュ療法. 川島書店.
- 総務省統計局 (2011). 人口基本集計結果. <http://www.stat.go.jp/data/index.html> (2017年5月10日取得).
- 総務省 (2015). 社会課題解決のための新たなICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html> (2018年6月1日取得).
- 総務省 (2017). 通信利用動向調査 平成29年調査. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html> (2018年6月1日取得).
- 鋤柄のぞみ (2013). コラージュによる孤独感の表現特徴——「ドライ」と「ウェット」からの検討——. 日本医科大学基礎科学紀要, 第42号, pp. 13-35.
- すしばく. 使って楽しい、見て楽しい PAKUTASO. <https://www.pakutaso.com/> (2017年7月15日取得).
- 滝口正之・山根敏宏・岩岡真弘 (1999). コラージュ作品の発達の研究 (集計調査). 現代のエスプリ. 志文堂, pp. 175-185.
- 山根敏宏・森谷寛之 (1999). 中学生のコラージュ作品に関する調査研究. 箱庭療法学会, 第12巻2号, pp. 91-98.



**Abstract**

# **An Exploratory Study of Images of Children Expressed Through a Collage by Male and Female High School Students**

Ruka Sugahara

The aim of the study was to explore images of children, as expressed by high school students through collages, who live in a society in which problems related to marriage and child-rearing are becoming serious and who still have a long way to go before child-rearing. With children as the theme, collages were produced, and interviews related to the collage production experience and work were conducted. To analyze the collages, formal analysis and content analysis were applied. To analyze interviews, Kinoshita's (2016) Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) was applied. The results show no significant difference or deviation among any of the items in the formal and content analyses of the work, but the M-GTA analysis extracted several images of children. This finding suggests that high school students, both male and female, have several similar images of children that are positive and approximately the same as those of adults. The study also found that the creators' memories of their childhood influenced their expression of images of children through the collage

Keywords: high school students, images of children, collage, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)